

サンフォード大学での
海外臨床薬学研修を終えて

薬学部 薬学科 6年

060973211

大塚 光穂

2011年6月5日から19日まで、アメリカのアラバマ州にあるサンフォード大学にて海外臨床薬学研修を行なった。私がこの研修の選考に応募した動機は、日本の薬学部の6年制教育は、アメリカをはじめとする医療先進国の教育制度を参考にしたものであり、アメリカでの薬学教育がどのようなものであるかに関心を持ったということ、また、アメリカの臨床での薬剤師の役割を、自分の目で見てみたいという気持ちがあったということである。

2週間という短い期間ではあったが、地域のクリニック、街の総合病院、公衆衛生局など様々な施設を見学し、また、アメリカの薬学教育や医療制度についても触れることができ、見聞の広がるとても良い経験となった。これらについて、見学した施設の概要を交えながら以下に述べたいと思う。

St. Vincent' s East Family Practice、Jefferson County Dept. of Health Western Health Center、Christ Health Centerは、外来患者が1日約20~40人前後の地域のクリニックである。このようなクリニックでは、糖尿病、高血圧症、高脂血症など、慢性的な服薬が必要な患者が大半を占めている。薬剤師は、そのような患者に対して面談を行ない、降圧薬や糖尿病薬、抗凝固薬などの副作用モニタリング、コンプライアンスの確認、治療効果の評価などを行っていた。

特に印象的だったことは、St. Vincent' s East Family Practiceのワーファリンクリニックである。ワーファリンクリニックは、DVT（深部静脈血栓症）などによりワーファリンを服用している患者を対象とした薬剤師専門外来であり、ワーファリンの服用方法や服薬意義の指導、副作用の有無の確認、コンプライアンスの確認などを行なう。また、来院毎にINR値を測定することによって治療効果を評価し、必要に応じて投与量の変更の判断などを行なっている。また、州によって異なるが、アラバマ州ではワーファリンの投与量変更において、薬剤師が処方箋を作成することができる。コンプライアンスが良く状態も安定している患者など、医師の診察が必須でない場合も多いが、薬剤師による面談は、医師の診察の有無に関わらず必ず実施しており、薬剤師が重要な役割を担っていることを実感した。

Children' s Hospital of Alabamaは病床数300床の小児専門総合病院、St. Vincent' s Hospitalは病床数350床の総合病院である。これらの大きな病院では、薬のピッキングやIVH・抗がん剤の調製を含め、調剤はすべてテクニシャンと呼ばれる役職の方が行なっている。そのため、薬剤師は、医師や看護師と同伴するチーム回診や患者面談、診断や治療方針などに関する医師とのディスカッション、処方鑑査などに時間をかけることができおり、チーム医療において重要な役割を担っていた。

また、ここで驚いたことは、臨床研修中の薬学生は、担当教員から毎日課題

が与えられることに加え、薬剤師とほぼ同じ業務をこなしているという点である。学生であるにも関わらず、医療チームの一員として回診や、治療方針などについてのディスカッションを行なうなど、“薬剤師”として関わっていた。このことから、臨床研修に臨むまでに豊富な知識を蓄え、低学年次から臨床研修を経験していることは、教員やチームの医師・看護師からも信頼される要素であると思った。

Jefferson County Dept. Health は公衆衛生局であり、感染症、自然災害、人災、その他の健康被害など緊急事態の場合に、迅速に適切な対応を行なう機関である。2011 年における大きな自然災害と言えば、日本では東日本大震災、アラバマ州ではトルネードの多数発生が挙げられる。これらの自然災害を防ぐことはできないが、被害を最小限にとどめ、その後の復旧に努める上で、迅速な状況把握と正確な情報提供、物資の供給、緊急時対策マニュアルの作成など、この公衆衛生局が非常に重要な役割を果たしている。この中での薬剤師の役割としては、病院やクリニックと同様に、患者のケアが第一にある。万が一、医療施設が使用不可能になった場合も、博物館のホールや学校の体育館などに設置された医療施設 (POD :Point of Dispensing) 内において、患者へのインタビューやワクチン接種、薬の提供などを行なっているようだ。

この研修において、日本とアメリカにおける、医療の中での薬剤師の位置づけと薬学教育制度の違いを知ることができた。アメリカの薬剤師は日本の薬剤師に比べて、チーム回診や、投与量設定や数値測定も含む患者面談など、多様な専門業務を行なっているという印象を受けた。それは、薬学部在学中の講義や研修で厳しく鍛え上げられた成果なのだろう。

これらを通し、臨床薬剤師に求められるものは、専門性と信頼性であると感じた。人の命に関わる“医療”に携わる以上、薬に関する深い知識はもちろんのこと、病態や検査値・検査方法についても幅広く知識を持っていなければならない。また、医師・看護師などの他の医療スタッフや患者から信頼されることは、薬局においても病院においても非常に重要なことであり、スタッフ間での連携が患者へのよりよい医療の提供につながると思う。私は、専門性を兼ね備えた、信頼される薬剤師になりたいと強く思うようになった。そして、日本でも、アメリカのように薬剤師の活躍の場がより一層広がることを望んでいる。